



一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。答えは問十四以外は黄色の解答题用紙に書きなさい。問十四の答えは国語五の解答らんに書きなさい。

その夏、妹のマーシャが生まれるとき、セリョージャは田舎に預けられることになった——他の子たちはおじいさんのうちにやられたけれど、セリョージャはひいおじいさんのところに行かされた。ひいおじいさんは遠い田舎に住んでいたの、たどり着くのに大変な道のりだった。父親とふたりでまず汽車に乗り、それから小さな蒸気船に乗りかえ、それから長いこと歩いた。夜ふけ近くにようやく村にたどり着いた。

ひいおじいさんが住んでいる農家は村の端にあつた。中に入つて、①セリョージャは息をのんだ。何から何まで、持っているロシアの昔話の絵本に描いてあるとおりだったからだ。ロシア式暖炉にはシースキンコートがかかっている。それは昔話のおじいさんが、自分のかわいいそんな娘を、モロスコの森に連れていくときに着るコートだ。それに、まづペチカ用の鍋ばさみが置いてある場所まで、絵に描いてあるとおり。においも特別だった。一生忘れられないようなにおい。古い羊皮、酵母、リンゴ、馬の小便その他わけのわからないものの混じつた、この世にまたとないにおい……。

おばあさんがふたり、父のほうに飛んできて、キスしたり泣いたり、あれこれたずねたりした。戦前、まだ小さかったころ父もここに遊びにきたことがあるのだ。

セリョージャもキスされた。おばあさんのひとりはどうということもないけれど、もうひとりのほうはがりがりにやせていて、歯が一本もなく、こわい。

「セリョージャ、父さんのおばさんのナターシャおばさんとアンナおばさんだよ」父はそう言った。「おまえのおじいさんのおねえさんだ。だから、おまえにとつてはおばあちゃんみたいなもんだね」

②「おばあちゃんならもういるのに！」とセリョージャはしずんだ気持ちで思い、すぐに母親の母である、髪にパーマをかけたおばあちゃんのきれいな顔を思い出した。このおばあちゃんは劇場で經理の仕事をしているので、セリョージャをよく子ども向けのショーに連れていつてくれる。セリョージャは顔をゆがめたが、何も言わなかった。

そのとき、ひいおじいさんが入ってきた。大柄で、不細工なクマみたいだった。おばあさんたちはすぐにおとなしくなり、片方が言った。

「お父さん、ヴィクトルが来たんですよ、イワンの息子の」

ふたりはキスし合った。

「われらが一族の者らしくなったのう」ひいおじいさんが低い声で言った。

「ちいこい子だったか」

③セリョージャは、父がおどろいてるように思えた。

おばあさんたちは、せわしく動き回つて、大きな黒パン、スプーン、「茶わん」と呼んでいる緑色の皿をテーブルに並べた。

セリョージャにはだれも注意を払ってくれなかったが、退屈しなかった。いろいろなめずらしい品々にそつと「a」をこらした。おどろいたことに、見たことのあるものまでここでは何だか今までにない別の姿をしている。例えば、スプーンは木でできているし、枕には、うちみたいに白いカバーではなく、赤いカバーやカラフルなカバーがかけられている。

こわくないほうのおばあさんが、青ネギ、キュウリ、ジャガイモをぎざぎざで皿に入れ、もうひとりのおばあさんが、どこからともなく裏こし器と卵を持ってきた。

子供が三人やつてきた。そのうちのふたりは女の子で、セリョージャより年上、残りの一人が少年で、見た感じでは同い年か少し年下のようだ。

「ほら、仲間に入れてもらおうといい」と父が言った。「おまえのまはとこだよ」

三人は、マリンカ、ニンカ、ミチチカといった。セリョージャはびつくりしてしまった。こんなにいっぱい親せきがいるなんて知らなかった。

食たにつく。テーブルの真ん中に茶色っぽいスープの入った皿があるが、めいめい皿はなく、スプーンと、パイみたいに大きく平たいパンが置いてあるだけ。皿から直接みんなで食べるらしい。ひいおじいさんが十字を切り、皿からスープをスプーンですくうと、続いてみな順番にひいおじいさんになった。

「食べてごらん、オクロシカだよ」と父がささやいた。みな何だかとても上手にスープをすくい、テーブルにこぼすような者はひとりもない。ミチチカまでも。

ひいおじいさんが父に、工場のことや暮らし向きのことをたずね、父はセリョージャのほうなど見向きもせず答えている。セリョージャは、じつとすわつてパンのかけらをいじくりながら、同じ皿からみなスープを飲むことにおどろいている。

アンナという名前のこわいほうのおばあさんが、とつぜん白い深皿を持ってきて、みなで共有の皿から少しスープをよそい、セリョージャの前に置いた。

「さあ、お食べ、都会風に慣れちまったんだね」おばあさんは歯のない口元を動かして小声で言った。

女の子ふたりはくすくす笑い、男の子はふんと鼻息をたてた。

すると急にセリョージャは自分が不幸でひとりぼっちだという思いにおそわれた。こんなところにいるで明日父といっしょに帰ろうと思つた。

自分の前には白い深皿があり、他のみなは皿から直接食べている。セリョージャにはそれがとてもみじめなことに思われた。父はそばにすわつて食べているのに、何にも気づいてくれない。涙のどのあたりまでこみあげ、もう今にもあふれそうになった。

「なんで食べないんだね？ きらいなのかい？」おばあさんが聞いた。

「きらいじゃない」セリョージャは蚊の「b」のような声で言った。

涙がひとりであふれ出てしまった。④自分は《 》とわかつたが、もう手遅れだった。

だれも自分のほうを見ていない。セリョージャは、白い深皿を押しつけ、皿のほうに身を乗り出した。スープは冷たくて酸っぱい。スプーンの中に、これまで食べたことのない緑の長ネギが浮いている。

その後、テーブルには大きな卵焼きとゆでたジャガイモが出された。ふだん食べているものと同じだったので、セリョージャはそれを食べた。アンナおばあさんは、セリョージャを寝かせるために部屋の反対側に連れていった。大きくて高いベッドがあり、カラフルな枕がいくつも並べてある。

⑤横になつてから、ここで暮らすのはせつたいやだ、と思つた。

翌朝、目が覚めたときには、父はもう帰つてしまつていた。そう告げたのはアンナだったが、セリョージャは相変わらずアンナのことを「おばあちゃん」と呼んでいる。アンナおばあさんは、牛乳と残りもののパンを食べさせてくれ、遊んでおいでと言つた。子供たちはもう遊びに行つてしまったようだ。

外に出た。まわりを一周してわかったのは、その家かなり大きく、建て増した部分もあり、少し離れたところに納屋が建っているということだ。ドアが開いていたので、納屋の中をのぞいてみると、作業台があり、壁には鉋やハンマーや鉄でできた道具がいろいろかかっている。名前も知らないようなものばかり。作業台の下には道具箱が置いてある。箱の中は仕切られていて、さまざまな釘が大きさごとに分類され納められている。セリョーシヤは、中くらいの長さの釘を手にとった。小指くらいの長さ。ハンマーも手にして、どこに釘を打とうかと場所を探した。

出入り口のところに腰をおろし、釘を箱から出して足もとに山にして置き、敷居に釘を打ちこみ始めた。最初はうまく打てず、指を叩いたり釘を曲げてしまったりしたが、だんだんうまくいくようになった……。

すると不意に、そこにいるのは自分ひとりではないことを感じた。すぐそばにひいおじいさんが立っていて、セリョーシヤの顔を見ているので、びっくりしてしまった。⑥ ひいおじいさんは一言も口にせずにはハンマーと釘を数本手にすると、セリョーシヤが打ちつけた釘のとなりに等間隔で軽やかに釘を打ちこんだ。

「柄の先を持つんだ」老人はぐもった声で言った。「それから、釘はこうやって立てるんだ。一発で打ちこんでこらん」セリョーシヤは、ひいおじいさんがおこっているわけでもなさそうだとわかった。

老人の教えてくれたとおりハンマーを構え、それから長いこと釘を打っていたので、敷居はすっかり釘だらけになった。それから立ちあがって、出ていこうとした。ひいおじいさんは板に鉋をかけていたが、すぐに鉋をわきに置くと、先が二つに分かれてとがっている、曲がった鉄の道具をよこした。「さあ、釘抜きを持ってこらん！ 今度は釘を抜くんだ！ 釘は必要なところに打つもんだ。あそこには釘はいらん」

セリョーシヤは両手で釘抜きを受け取った……。ひいおじいさんはまたひざ立ちになってセリョーシヤから釘抜きを取り返すと、どうやって持ったらいいか教えてくれた。⑦ その指はものすごく大きくて、手は黒く、つめは分厚くて古いボール紙のような茶色をしている。

「こんな指だったら、釘なんて、鉄挺がなくなつて抜けそうだ」とセリョーシヤは思った。

長いこと釘を引っかけようと格闘したが、思いどおりにならない。これから引き抜かなくてはならない帽子たちが、輝く道をなして並んでいるのをセリョーシヤはうらめしい思いでながめた。⑧ わなにかかったんだと思った。ひいおじいさんが近づいてきて、ハンマーで釘抜きのきつるはしのような部分を軽く叩くと、釘抜きは釘の首をしかりくわえた。

「押してこらん！」ひいおじいさんが言うとおりに、セリョーシヤは柄を両手で下に押した。

釘は、わずかにゆれたあとしりごみし、上にせり上がつてくると、まるで待つてましたとばかりに軽々と樂しげに飛びあがつてきたので、あとは最後の最後にほんのちよつと引っぱるだけでよかった……。釘はすっかり地上に姿を現した。

次の一本はそううまくはいかなかった。帽子が飛んでしまった。ひいおじいさんはちらりとこちらを見ると、相変わらずぐもった声で言った。

「釘を大事にせい」

セリョーシヤは三本目に取いかかった。ひいおじいさんは道具箱を持ってきて、その中に入れるようにと言いつけた。こうしてセリョーシヤは、呼ばれるまですつと⑨ 釘抜きと渡り合つことになった。

昼食の後、ひいおじいさんがどこかに行ったので、セリョーシヤは隠れてしまおうと心に決めた。屋根裏にのぼる。そこはほろりつぽく神秘的な場所

だったが、敷居に打ちつけられたまま引き抜かれないでいる釘のことが気になつてしかたなく、結局、屋根裏からおりて納屋に戻つた。

それからまたひいおじいさんがやってきて、セリョーシヤの仕事ぶりをながめていたが、何も言わなかった。どの指も傷つき痛んだが、なぜかその場を離れることができなかった。

「釘を打ちこむのは五分でできたのに、抜くのは百時間もかかりそうだ」セリョーシヤはだれにともなく腹を立てた。

暗くなるまで釘抜きや鉄挺にかかりきりになつていたが、曲がつたものも叩かれたものもすべての釘がようやく道具箱に収まつた。セリョーシヤが箱をひいおじいさんに返すと、ひいおじいさんはそれを作業台の上に置いて言った。

「うちに戻ろう……」

⑩ ひいおじいさんはほめてくれたが、セリョーシヤは満足だった。翌朝は早く目が覚めた。女の子とミーチカが裸足で家中を歩きまわっている。セリョーシヤはサンダルをはきながら、どうしたらあの子たちの仲間入りができるだろうと考えていたが、そのときひいおじいさんが家に入ってきて言った。

「いつしよにおいで、セリョーシヤ」

セリョーシヤはびっくりしたが、ついていった。

ひいおじいさんが向かった先は納屋だった。納屋では、相変わらず作業台の上に昨日の釘の入った道具箱がのつている。ひいおじいさんは、本くらの大きさだけれどもつと薄い鉄板を取ると、それを背の高い丸太にのせ、二本の指で曲がつた釘を取り出して、ハンマーで軽く叩き始めた。釘はまっすぐになり、これまでとは違つたふうに輝きだした。

「こういうふうにしてこらん」ひいおじいさんが言った。

セリョーシヤはあつけにとられた。

「そんな仕事、死ぬまでかかる」と思った。ハンマーを手にして軽く叩いてみる。釘は反対を向いてしまふ。まるで生きているかのように、あつちを向いたりこつちを向いたりする。セリョーシヤは、打ちそこねて指を叩いてしまふ……。

ひいおじいさんは、ふうむと声を出した。

「もつと軽く持つんだ！」

それでセリョーシヤは、泣きださないようにくちびるをぎゅつと噛み、これでもか、これでもかと叩いた。しばらくの間はどうにもならなかったが、やがて突然ひとりでにうまくいくようになった。⑪ 釘が言つことをきくようになったのだ。

仕事が終わつたのでセリョーシヤは道具箱を作業台の上に置いた。ひいおじいさんはそれを作業台の下にある箱にしまい、それから背をのばして言った。

「鶏舎の板を二枚張りかえなくちゃならん。行こう、手伝つておくれ」

その夏セリョーシヤは、とうとう、はとたちと仲良くなる暇がなかった。ひいおじいさんのあとをついてまわり、いつしよにありとあらゆる仕事をしたからだ。ま。指物仕事、家の仕事、鶏舎の仕事……。夏が終わりがけたころ、ひいおじいさんのところに荷車で木材が運ばれてきた。納屋のそばで荷がおろされた。ひいおじいさんは、それをきためつすがめつながらめ回し、ため息をつき、首をふつていた。それから、セリョーシヤを呼んで手伝うよう言った。はじめ、ひいおじいさんは長いこと鉋の鉄をとき、それから古いのこぎりの歯振をつけ、用具が整つたところでようやく仕事に取りかかった。セリョーシヤの助けは必要なかったが、それでも⑫ ひいおじいさんはセリョーシヤを手放してはくれず、何かしらずつとやることをあたえた。セリョーシヤ

ージャがいよいよ田舎を後にするという段になってようやく仕事が終わった。できあがったのは、ふたのついた大きくて長い箱だった。

はこのミーチカが最後の日に聞いた。

「お葬式には来る？」

「お葬式って何？」セリョージャはびっくりした。

「ひいおじいちゃんは死ぬんだよ。そうじゃなきゃ、棺桶作るわけないだろ」
そうか。木の箱は棺桶だったのか！ セリョージャはようやく納得したのだった。

翌日、父が迎えに来た。ひいおじいさんが父に棺を見せると、父は「素材がともいいですね」と言った。

次の夏、セリョージャはまた田舎にやってきた。⑬でも今度は前の年とはまるつきり違っていた。はとたちと仲良くなり、いっしょに小川に行ったり、森でベリーを摘んだりした。納屋には一度だけ行ってみた。作業台の上には釘の入った道具箱があった。あの夏セリョージャが形を直した釘である。でもひいおじいさんはもういなかった。

（釘）リュドミラ・ウリツカヤ作 沼野恭子訳『子供時代』より。作問の都合上、本文の一部を省略しました。）

【注】

- | | | |
|---|---------|---|
| 1 | モロスコ | ロシアの昔話。まま子のことを気に入らないおばあさんが、まま子を森に置き去りにしてくよう命じる。しかしモロスコ（厳寒の精）はまま子が善良なのでこえ死にさせずおくりものを与えて帰す。 |
| 2 | ペチカ | 暖炉の一種。 |
| 3 | はとこ | またいとこ。それぞれの親がいとこ同士である子どもたちの関係。 |
| 4 | 鉄挺 | 釘を抜く道具。 |
| 5 | つるはし | つるのくちばしの形をした土をほるための道具。 |
| 6 | 指物仕事 | 板を組み合わせて家具などを作る仕事。 |
| 7 | ためつすがめつ | いろいろな方向からよく見るさま。 |
| 8 | 歯振 | のこぎりの刃が交互に左右に曲がっていること。 |

問一 ①セリョージャは息をのんだ について、

(1) ここからセリョージャのどのような気持ちがわかりますか。次のア～エの中から最もよくあてはまるものを一つ選び記号で答えなさい。

- ア おそれる気持ち。 イ おどろく気持ち。 ウ がっかりする気持ち。 エ 心を打たれる気持ち。

(2) セリョージャが(1)のような気持ちになったのはなぜですか。次のア～エの中から最もよくあてはまるものを一つ選び記号で答えなさい。

- ア ひいおじいさんが住んでいる農家は美しい田舎だと父から聞いていたのに、実際は話と違っていたから。
イ ひいおじいさんが住んでいる農家は、昔話の中に出てくるような子どもころからあこがれていた風景だったから。
ウ 汽車に乗り船に乗りしてやっとたどり着いたのに、ひいおじいさんが住んでいる農家はみすばらしくまずい家だったから。
エ 長い道のりを旅してたどり着いたひいおじいさんが住んでいる農家は、自分がふだん知っている世界とは違う様子だったから。

問二 ②「おばあちゃんならもういるのに！」とセリョージャはしずんだ気持ちで思い ありますが、セリョージャがこのような気持ちになったのはなぜですか。次のア～エの中から最もよくあてはまるものを一つ選び記号で答えなさい。

- ア 二人のおばあさんは子ども向けのショーに連れて行ってくれそうにないから。
イ 二人のおばあさんはこわそうな人なので、今にもおこられそうな気がしたから。
ウ 二人のおばあさんは自分のおばあちゃんのイメージとは違う様子であったから。
エ 二人のおばあさんは本当のおばあさんではないのに「おばあちゃん」と呼ぶようにいわれたから。

問三 ③セリョージャは、父がおどおどしているように思った とありますが、セリョージャがそのように思ったのはなぜですか。次のア～エの中から最もよくあてはまるものを一つ選び記号で答えなさい。

- ア 父が一族の中で、相手にされていらないように見えたから。
イ 大柄なひいおじいさんとくらべると、父が小さく見えたから。
ウ 自分にとつての父が、ここでは子どもあつかいをされているから。
エ 田舎に不慣れなために、父がいつもと違った様子であったから。

問四 「a」をこらした 蚊の「b」ような声 について、

- 「a」には身体の一部をあらわす言葉が入ります。漢字で答えなさい。
「b」には、あてはまる言葉を漢字かな交じりの二字で答えなさい。

問五 ④ 自分は《 》とわかった。とありますが、《 》の中にはどのような言葉が入りますか。次のア、イの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア みんなと同じように緑の大皿から食べたいのだ
イ 都会の自分の家で食べているように食べたいのだ
ウ スープを上手に飲めないので歓迎されていいのだ
エ 不器用だとみんなに思われたくないのだ

問六 ⑤ 横になつてから、ここで暮らすのはせつないやだ、と思った。とありますが、その理由としてもっともよくあてはまるものを次のア、イの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 自分がいることで周囲のたくさん大人の大人たちに氣を使わせてしまうので、めいわくをかけているように感じ、いこちが悪くなつたから。
イ ずいぶん年をとったひいおじいさんやおばあさんに囲まれて、家も昔話の世界のようで、お化け屋敷に^{やみ}いるかのように感じて落ちてしまふと思つたから。
ウ 食べ物^をがふだん食べているものと違つて、何から何まで田舎風で口に合はず食べられないので、料理したおばあさんたちにきらわれないでしまふと思つたから。
エ この家の暮らしは自分のふだんの生活とはひどくかけはなれていて、なじむことができないし、自分だけが違ふということ意識しないではいられないから。

問七 ⑥ ひいおじいさんは一言も口にせずにはハンマーと釘を数本手にすると、セリョージャが打ちつけた釘のとなりに等間隔で軽やかに釘を打ちこんだ。とありますが、ひいおじいさんがこのようなことをした理由としてもっともよくあてはまるものを次のア、イ、ウの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 自分にことわりもせず勝手に納屋に入りこんで釘を打っているセリョージャに腹を立て、だまつて釘を打つことで怒りを伝えようとした。
イ セリョージャの釘の打ち方があまりにも不慣れで手際が悪いので、家に古くから伝わる伝統的な打ち方をセリョージャに伝授しようとした。
ウ はとたちと仲良くなれずにひとりでいるセリョージャをかわいそうに思い、自分のあざやかな釘の打ち方を見せて楽しい気分にしようとした。
エ セリョージャがひとりで釘を打ちこんでいる様子を見て、釘の打ち方を教えることをきつかけにセリョージャといつしよの時間を過ごそうとした。

問八 ⑦ その指はものすごく大きくて、手は黒く、つめは分厚くて古いボール紙のような茶色をしている。とあることから、ひいおじいさんについてどのような人であることがわかりますか。二十五字前後で答えなさい。

問九 ⑧ わなにかかったんだ。とありますが、ここからセリョージャのどのような気持ちが読み取れますか。次のア、イ、ウの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア 思いどおりにならず、じぶんはだめだという気持ち。
イ ひいおじいさんの好意をうたがう気持ち。
ウ ひいおじいさんの教え方が悪いと思う気持ち。
エ 知らない世界にまよいこみ、とほうにくれる気持ち。

問十 ⑨ 釘抜きと渡り合う。とありますが、これはどういうことですか。次の文の（ ）にあてはまる言葉を五字前後で考えて答えなさい。

セリョージャにとって釘抜きは（ ）ことだったが、それとずっと取り組み続けたということ。

問十一 ⑩ ひいおじいさんはほめてくれなかったが、セリョージャは満足だった。とありますが、これはなぜだと考えられますか。次のア、イ、ウの中から一つ選び記号で答えなさい。

- ア ひいおじいさんの家に来て、初めて自分がやりたいことを見つけたから。
イ 抜くの^をに百時間もかかると思っていたのに、意外と早く釘を抜き終わったから。
ウ 指が傷つき痛くなるほど大変だったが、あきらめずに釘を抜くことができたから。
エ ひいおじいさんから都会の子どもだとばかりにされていると思っていたが、見返すことができたから。

問十二 ⑪ 釘が言うことをきくようになった。とありますが、これはどういうことですか。「く」ということ。「く」につながるようにわかりやすく言い換えなさい。

問十三 ⑫ ひいおじいさんはセリョージャを手放してはくれず、何かしらすつとやることをあたえた とありますが、この部分からひいおじい

さんのどのような気持ちがわかりますか。あてはまらないものを次のア～オの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 都会に戻るセリョージャに、少しでも自分のできることをしてやりたいと思う気持ち。

イ セリョージャといっしょに作業することで、離れて暮らしてきた時間をうめたいという気持ち。

ウ 田舎になじめずさびしそうだつたセリョージャに、ここでの暮らしの良さを感じてほしいと思う気持ち。

エ 自分の葬式の準備をするという大切な仕事をひ孫に見せて、一族のひとりとして迎えようとする気持ち。

オ セリョージャに仕事を与え、試練を乗り越えさせることで、ひ弱な体をきたえ直したいという気持ち。

問十四 ⑬ でも今度は前の年とはまるつきり違つていた とありますが、

(1) 前の年と今度は、セリョージャにとつてどのように違つていたのですか。答えは左の解答らんじに、あてはまるように書きなさい。

前の年は

たが、

今度は

た。

(2) なぜ(1)のように違つたのだと思いますか。文章全体から考えて自分の言葉で答えなさい。答えは左の解答らんじに書きなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。



① 日本列島は雨が多く、水に恵まれています。そのため豊かな水に恵まれた国だと考えられています。降雨量は世界平均の二倍以上あり、川もかれることなく流れ、わき水が出、地面の下には地下水があります。森はみずみずしく、雪解けの水が田畑をうるおしています。

「X」という言葉もあるように「ふんだんに」日本人は水を使っています。

「a」水はふんだんにあります。「b」この降水量を人口で割ったらどうでしょうか。日本は人口が多く、気温が高くて水の蒸発散量も多いため、じつは日本人ひとりが使える水の量(水資源賦存量)は世界平均の三分の一程度なのです。

水が豊かだと感じられるのは、注インフラが整備され水を効率よく使っているからなのです。日本より水資源賦存量が多くても水に不自由する国もあります。ダムや貯水池をつくり、水路や管路が整備されているからにはかなりません。そのおかげで、わたしたちは雨が降る降らないにかかわらず、「X」水を使うことができるのです。

わたしたち動物は水がないと生きてはいけません。いまわたしたちは水道をひねれば即座に水を得ることができ、それも安全に飲むことができる驚嘆すべき環境に暮らしています。全国で水道の敷設がはじまったのは明治時代になってからで、各個人の家まで水道が行き渡るのは一九七五年(昭和五〇年)ごろのことです。それまで家庭の水は井戸水や川の水、「c」わき水などで、共同の水場を利用してきました。

地域や季節によって供給量が変化するため、生活や農業のための水不足に苦しみ、あるいはたび重なる洪水に悩まされてきましたが、上下水道の普及によって水を求めて争うこともなくなり、またコレラ、チフス、赤痢の集団感染なども大幅に減少しました。

現在、水道水の水源の七二・六パーセントはダムと河川水によるもので、少なからずとも山に依存しています。

日本は河川の勾配が急です。そのため降った雨は短期間で海に流出します。雨が降らないと水不足に苦しめられ、大雨が降ると水害に苦しめられてきました。「d」ため池やダムが必要になり盛んにつくられてきました。

日本ではダムは、主に治水と利水を目的としてつくられます。治水とは洪水の緩和や河川の水量の維持、海岸保全で、利水とは農業用の灌漑、飲み水の供給、工業用水の供給および水力発電などのことです。ダムが最初につくられたのは飛鳥時代といわれています。大阪府南部にある狭山池が、日本最古のダム形式のため池で、『古事記』や『日本書紀』にも記載されています。これは農業の灌漑用のダムになります。明治時代まで、日本でつくられたダムはすべて灌漑用のダムでした。

むかしから田畑に水を供給することは死活問題で、水をめぐる流血沙汰も多発していました。すでに弥生時代におきていた争いは、富や耕作地、水利権などをめぐっての争いだったのではないかと考えられています。

むかしは川にはいくつもの堰が設けられ、そこから水路を引き、各自の田に水を引いていました。

争いにならないように線香が燃える時間で排水時間を計った「線香水」や、焼けた鉄片を握り、やけどが軽い者を勝者、重いものを敗者

とした「鉄火」などの取り決めが全国にあり、水を共同で利用するための知恵を働かせていました。しかしそれでも争いはいく度も起こり、各地の郷土史などにはしれつな戦いの様子や戦いを避けようとした努力が数多く残されています。自分の田に水を引きこむことを戒めた「我田引水」という言葉も残っています。

② いまわたしたちは水を使う際、意識せずに使っています。それはきわめて幸せなことです。

その一方で水に無関心になり、水の文化は失われていきました。

水との関係に、他者への関係と共同体の維持の関係が日本文化をつかさどってきました。

「水が合う」とか「水が合わない」という言葉もあります。新しい土地の風土に合う合わないことをいった言葉ですが、むかしは地域によって水は違うものでした。文字通り人びとは違う水を飲んでいました。北陸地方では、むかしから続く婚礼儀礼のひとつに「お水合わせ」とか「合わせ水」というものがあります。キヨシキ当日に両家の井戸からくんだ水を新郎の自宅の玄関で盃に注ぎ、新婦がこの水を飲んで、盃を地面に打ち付けてくだいて埋めるというものです。③ いかに水が大切であり、家や地域と密接に関わっていたかがわかる風習です。ほかに日本語では「水」を比喻として用いた多くの言葉があります。さきほどの「水が合わない」から「④水掛け論」「水もの」「⑤水をさす」「水に流す」「水をあける」などなのです。

水は直接使っているだけが使用量とは限りません。

環境省のホームページにバーチャルウォーターについて記載があります。

バーチャルウォーターとは、**仮想水**ともいわれ、輸入している食料が、どのくらいの水を使っているかを推定したものです。「例えば、一キロのトウモロコシを生産するには、灌漑用水として一八〇リットルの水が必要です。また、牛はこうした穀物を大量に消費しながら育つため、牛肉一キロを生産するには、その約二万倍の水が必要です。つまり、日本は海外から食料を輸入することによって、その生産に必要な分だけ自国の水を使わないで済んでいるのです」(環境省)。東京大学生産技術研究所沖教授らのグループの試算によると、総輸入量は、年間六四〇億立方メートルで、日本国内で使用される年間農業用水使用量五九〇億立方メートルを上回ります。またその三分の二はアメリカからの輸入です(三八九億立方メートル)。二〇〇二年(平成一四年)に国連が定めた国際山岳年は、FAO(国連食糧農業機関)が**スイシン**したもので、山岳山間地帯は水やサードビスの供給、食糧の安全を担うことから、山地の環境保全および持続可能な開発を促進し、社会の**フクリ**を発展させることを目的としたものです。山を日本だけではなく、地球規模で考えることも必要かと思えます。

(永田弘太郎編集・執筆『日本の山はすごい!』より。作問の都合上、本文の一部を省略しました。)

【注】

インフラ インフラストラクチャー。社会生活の基本となる施設・道路・鉄道・ダム・学校・病院・公園など。



問一 本文中の太字のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

問二 空らん「a」「d」にあてはまる言葉をそれぞれ次のア～カの中から選び記号で答えなさい。

ア しかし イ なぜなら ウ そのため エ たしかに オ あるいは カ とりわけ

問三 ①日本列島は雨が多く、水に恵まれています。とありますが、実際にはどのようなだと筆者は言っていますか。もっともよくわかる一文のはじめとおわりの五字を書きなさい。句読点も一字と数えます。

問四 本文中に二か所ある空らん〔X〕には、同じ言葉が入ります。あてはまる言葉を次のア～エの中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 湯水のように イ 水を得た魚のように ウ 立て板に水のように エ 焼け石に水のように

問五 ②いまわたしたちは水を使う際、意識せずに使っています。とありますが、このことを具体的に言っている一文をここより前の文中からさがし、はじめとおわりの五字を書きなさい。句読点も一字と数えます。

問六 ③いかに水が大切であり、家や地域と密接に関わっていたかがわかる風習です。とありますが、いかにがかかっている部分を次のア～クから二つ、選び記号で答えなさい。

いかに ア水が イ大切にあり、 ウ家や エ地域と オ密接に カ関わっていたかが キわかる ク風習です。

問七 ④水掛け論 ⑤水をさす の意味としてあてはまるものをそれぞれ次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

④ 水掛け論

ア 両方がだまっただまま全く進まない議論。
イ 両方が理屈を言い張っていつまでも決まらない議論。
ウ 両方が理想を言うばかりで実現できそうにない議論。
エ 両方がおたがいに欠点を言い合って意欲が失われた議論。

⑤ 水をさす

ア 相手の気持ちにさそいかける。
イ 競争相手を大きく引きはなす。
ウ 行きすぎているものごとをおさえる。
エ じゃまをしてうまくいかないようにする。

問八 本文の内容にあてはまらないものを次のア～エから一つ選び記号で答えなさい。

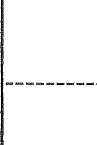
ア 日本人は古来から田畑に引く「水」を分かち合うことで共同体を維持してきたことから、日本文化と水は深い関わりを持つことになったということができる。

イ 現在日本では農業で使用する水に恵まれているが、私たちが口にする食料は海外で生産されたものも多いため、日本で使用する以上に多くの水を使っていると考えられる。

ウ 現代の日本ではぜいたくに水を使うことがあたりまえになったので水を大切に思う気持ちがうすれ、課題である環境保全を重要視せず、地球規模で水の重要性を考えることが困難になっている。

エ 日本では水に恵まれていたものの、昔は水不足や水害に苦しめられ、田畑に供給するための争いが起こることも多かったため、現在の私たちが何の苦勞もなく水を使うことができるのは幸せなことである。

--

[illegible]

5

10

國語一五

アクリ

1881

10

う

10

[illegible]